

Title	『ここがヘンだよ日本人』で描かれた外国人イメージ
Sub Title	Image of "foreigners" represented in a TV program series, "Kokoga hendayo nihonjin"
Author	渋谷, 明子(Shibuya, Akiko) 萩原, 滋(Hagiwara, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.56 (2003.) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000056-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ここがヘンだよ日本人』で描かれた外国人イメージ⁽¹⁾

Images of “Foreigners” Represented in a TV program series,
“*Kokoga hendayo nihonjin*”

渋谷 明子*・萩原 滋**
Akiko Sibuya Shigeru Hagiwara

As part of a larger project on TV stereotyping, we investigated how the images of “foreigners” were represented in *Kokoga hendayo nihonjin* (This is a strange country you Japanese live in), a prime-time variety show in which 100 foreigners gathered in a studio to discuss various issues with Japanese personalities and participants. By analyzing themes or topics of discussion in 146 broadcasts from October 1998 to March 2002, we found that the word “foreigner” was likely to be used (a) to arouse unfavorable images, (b) mostly by Japanese participants, (c) especially in themes related to the categories of culture, social practices, marriage and crime. In addition, the program contained video clips featuring activities of particular foreign individuals, and those video clips were found to represent favorable and anti-stereotypic images of “foreigners,” in contrast to negative stereotypes attributed to “foreigners” by Japanese participants in the discussion.

Key words: foreigners, stereotype, variety show, television

I. はじめに

2000年4月に石原東京都知事は、陸上自衛隊練馬駐屯地での挨拶で、「不正に入国した多くの三国人、外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している」と発言し、論議を呼んだ。特に「三国人」という差別と結びついた言葉の使用が問題となったわけだが、「外国人」とのみ言った場合は非難の声はさほど強くはなかったのではないだろうか。

最近の犯罪白書では、来日外国人（定着永住者、在日米軍関係者、在留資格不明者を除いた外国人をさす）による犯罪が増加傾向にあることが指摘されている。平成13年度の刑法犯の検挙人員では全体の3.7%、強盗では7.5%にまで増加したとされており（法務総合研究所、2002）。石原都知事の発言も、「三国人」という言葉さえ用いなければ、あながち誤りとは言えない。だが、在日外国人が置かれた社会

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（マス・コミュニケーション、社会心理学）

** 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授

的状況・背景を無視して、外国人犯罪の多さのみを強調するならば、外国人に対するネガティブなイメージを作り出し、外国人への差別を助長しかねない。

かつて外国人は、「外人」と呼ばれ、この言葉はかなり排他的な印象を与えた。現在では、通例「外国人」という呼称が、日本国籍をもたない人たちや「外国出身者」に対して用いられているようだが、この外国人という言葉は、どのような文脈で、どのような意味合いで用いられることが多いのだろうか。冒頭で示したように、どこかネガティブで差別的な意味合いで用いられることが多いのだろうか。

外国人は、日本人という「内集団」と対比して「外集団」として認知される集団ということになろう。ステレオタイプ研究によれば、外集団は、内集団よりも等質的で典型的なものとして捉えられ、複雑度の低い認知や変動性の小さい判断が生じやすいとされている (Park & Rothbart, 1982; Judd & Park, 1988; 唐沢, 1996)。したがって、日本人と外国人という対比がなされるならば、日本人 (内集団) よりも、外国人 (外集団) へのステレオタイプ化が生じやすいのではないかと思われる。また外国人と言った場合には、韓国人、アメリカ人、アフリカ人など特定の国、地域の人々に言及する場合に比べて、日本人との対比がより明確になり、否定的評価が生じやすいとも考えられる。

サイズの異なる 2 つの集団の成員に関して、ネガティブな情報とポジティブな情報を一定の比率で提示した場合、ネガティブな情報と少数派集団の結びつきが強く認識され、少数派集団に対してネガティブなバイアスが生じやすいことが知られている (Sugimori, 1991; 杉森, 1995, 1999; 中村・佐藤, 1994)。したがって、外国人を、「在日外国人集団」と捉えるなら、日本人 (多数派集団) よりも、(在日) 外国人 (少数派集団) に対して、特にネガティブな情報をその集団に典型的な情報と捉えやすく、非好意的なステレオタイプが生じやすいことが予想される。

特定の国や国民のイメージに関する分析や調査は少なくないが、「外国人」そのもののイメージを対象とした研究はきわめて少ない (竹田, 2000; 野呂, 2002)。この背景には、本来、「外国人」とは、日本以外のすべての国籍の人たちをさし、さまざまな国・地域の出身者をサブ・グループとして含む変動性の高い大集団を構成しているために、質問紙調査などで、そのイメージを尋ねにくいことがあるだろう。また、多様な国や地域を一度に紹介するようなテレビ番組は少ないだけに、「外国人」そのもののイメージをニュース報道やテレビ番組を対象として分析することも難しくなっている。

近年、海外旅行、勤務、留学などの形で外国に赴く日本人や日本に在住する外国人の数も増加しており、直接的な接触経験を通じて外国や外国人に対するイメージを形成する機会も増えつつある。しかしながら、大多数の日本人は、そのような直接体験をもたずに、やはりテレビをはじめとするマス・メディアの外国関連情報による間接的接触経験を通じて、外国人や特定の地域・国のイメージを形成している部分が依然として大きいように思われる。本稿では、さまざまな文化的背景をもつ日本在住の外国人が多数スタジオに集結して、硬軟取り混ぜたさまざまな話題に関して白熱した議論を繰り広げたバラエティー番組『ここがヘンだよ日本人』(TBS 系) を取り上げ、そこでの討論テーマの分析を中心に、この番組を通じていかなる外国人イメージが表象されていたのかを分析してみたい。

II. 討論系バラエティー番組『ここがヘンだよ日本人』(TBS 系)

『ここがヘンだよ日本人』は、1998 年 10 月から 2002 年 3 月までの 3 年半にわたって平日夜に TBS 系で放送されたバラエティー番組である。日本在住の外国人が多数スタジオに集結して、彼らの目から見た日本人や日本社会の問題点をいくつか争点として提示し、それに基づいて番組のメインとなるビー

トたけしや他の日本人パネリストも交えて日本語で論争を繰り広げるとというのが当初の番組コンセプトであった。こうした外国人による対日批判に呼応するような形で、「日本人の大逆襲」と題したシリーズが1999年1月に始まり、今度は「外国人にナンパされた女性編」「国際結婚トラブル編」「外国人お断りスペシャル」「スチュワーデス編」など日頃から外国人と接している日本人の側からの問題提起、外国・外国人批判がテーマとされるようになっていく。ここまでは日本人対外国人という対立図式が明確にされているが、その後は「いじめっ子対いじめられっ子」「ブス対美人」「関西人对関東人」など日本人同士の論争に外国人がコメントするような形式や「外国人の皆さん、NATO軍による空爆をどうお考えですか」「コロラド州高校生銃乱射事件：なぜアメリカは銃を捨てられないのか」など特定の国や地域の問題を俎上に乗せて外国人同士の論争を基軸とするような展開もとられるようになっていく。このようにスタジオ討論のテーマは多岐にわたっているが、文化摩擦、恋愛・国際結婚、戦争、外国人差別などの諸問題の背景にある問題行動・思想、文化的背景の相違などを掘り下げ、かなり本音に近い形で、時には感情的にも白熱したトークバトルが繰り広げられている。通常は、毎回の放送ごとに番組のテーマが決まっており、それに関する外国人や日本人の具体的な発言をテロップで提示したり、制作者側が用意したビデオ映像を流したりするなど、いくつかの問題提起を討論テーマとしてスタジオでの議論が展開するという形式がとられている。

こうしたスタジオ討論以外にも、毎回、番組のテーマと関わりなく、いくつかのビデオ映像が挿入されている。たとえば日本に滞在する外国人の生活や信条、半生などを「在日外国人ファイル」や「外国人出演者ファイル」、レギュラー出演者のゾマホン・ルフィンが母国のベナン（アフリカ）に小学校を建設する過程を「スタジオ外国人夢ファイル」という形で特定の個人に焦点を当てた「人物ファイル」としてシリーズ化している。また「100万円を拾ったら」などと状況を設定し、数カ国の人々の反応の違いをフィールド実験的に比較する「世界人間ウォッチング」、サラリーマンの1日や小学校高学年のお小遣いを比較する「世界比べてみよう」などの世界比較シリーズの他、肥満した人たちのダイエット合宿の様子なども継続して放送されている。さらに、スタジオ討論ではなく、「お国自慢 No1 決定戦」「中国の最強の霊能力者 vs 日本の霊能力者」「在日外国人に学ぼう：究極の節約術/究極の健康法」など、実演を交えたイベント企画を中心とした番組も2000年以降に増加しており、日本人と外国人を対立軸とする白熱した討論という当初の番組コンセプトが徐々に変質していく様子が明らかにされている。¹²⁾

この番組のひとつの特徴は、アフリカ出身の出演者が多数参加して、積極的に発言していることである。討論の素材としても、アメリカ、中国、韓国と並んでアフリカに関する話題が多く取り上げられている。これまでテレビに登場する外国イメージは、アメリカに関するものが圧倒的に多く（萩原・御堂岡・中村、1987）、最近では、中国や韓国についても多くなっている（川竹・杉山、1996；川竹・杉山・原・櫻井、2000）。テレビに比較的多く登場するアメリカ、中国、韓国などのイメージは、一つの番組の視聴経験によって、変化しにくいとしても、テレビに登場することが珍しい国や地域のイメージ（アフリカ、インド、南米など）は、一つの番組によっても、大きく変動する可能性がある。実際に、番組の視聴効果を測定するために、番組が終了して間もない時期に大学生を対象として実施した質問紙調査では、この番組の視聴経験によって、特にアフリカに関する認識やイメージに大きな変動が生じることが確かめられている（大坪・相良・萩原、2003）。また、この番組をよく見ていた者ほど「日本語を学び、日本社会に融け込もうとしている外国人には好意を感じる」「外国人犯罪が多いので、日本人が外国人に警戒心を持つのは仕方がない」「外国で日本人が盗難にあったり、だまされたりするのは、日本人の側に

も問題がある」といった意見に賛同する割合が高く、こうした番組視聴による影響が特定の国や地域ではなく、外国人全般の認識や評価に一般化する可能性も示唆されている。

III. 研究の課題と方法

本稿では、スタジオ討論の糸口になった問題提起の部分、すなわちテロップで提示された具体的発言や制作者側が用意したビデオ映像を中心に、その内容を分析し、そこで「外国・外国人」という言葉がどのように使われているか、それは特定の国・地域や人々への言及がなされた場合とどのように異なっているかを検討し、外国・外国人という言葉によって表象されるイメージを明らかにしてみたい。具体的には、「外国・外国人」という言葉は、1) どのような領域で多く使われたか、2) 非好意的な問題提起の際に、「外国・外国人」という言葉が用いられる傾向がみられたか、3) どのような国・地域との関連で、「外国・外国人」という言葉が用いられていたか、4) 特に日本人問題提起者が、「外国・外国人」という言葉を用いる傾向が強く、「外国・外国人」に対する非好意的な問題提起がみられるのではないかと、この点を検討する。また、特に日本人問題提起者によって取り上げられることが多かったアメリカ、アフリカ、黒人などの国・地域に関する言及内容を分析すると共に、スタジオ討論以外（外国人ファイル、世界比較、イベント企画など）の部分で表出された外国人、あるいは特定の国・地域に関するメッセージを取り上げ、スタジオ討論の部分と比較して、その特徴を明らかにしたい。

分析対象となったのは1998年10月から2002年3月に放送された『ここがへんだよ日本人』（TBS系）のうち、ビデオ収録に失敗した4回を除く全番組（146回）である。まず、時間経過に伴う番組内容の流れを構成表（進行表）の形で整理し、ビデオ映像、各発言などを要約あるいは逐語的に記録し、それを元に、以下のコーディングを行った。

(1) 分析単位：

(a) 分析対象テーマ：スタジオ討論の小テーマ（日本人や外国人からの問題提起のテロップやビデオ映像による問題提起で区切られた部分）、人物ファイル（特定の外国人の生活や半生の紹介）、世界比較（特定のテーマに対する各国の人々の反応や状況の違いを比較）、イベント企画（お国自慢、健康法、超能力など）などで、問題提起のテロップやビデオ映像で区切られた各部分。

(b) 対象国・地域：問題提起者が言及した「外国・外国人」、人種（白人、黒人など）、文化圏（イスラム、欧米など）、地域名（アフリカ、アジアなど）、民族名、国名すべてを、各分析対象テーマであげられるたびに、1つの問題対象国・地域とした。また、討論の過程で問題提起者以外が言及した国・地域についても、それが討論を方向づけるうえで重要な役割を果たしている場合には、追記することにした。ただし、「外国人の皆さん、どうお考えですか」という呼びかけで用いられた「外国人」、特集のテーマ、シリーズ名（在日外国人ファイルなど）は除外した。

(2) 分析カテゴリー：

(a) 提示形態：分析対象テーマが提示された形態別に、①スタジオ討論、②スタジオ討論以外（人物ファイル、世界比較、イベント企画など）という2つのカテゴリーに分類した。さらにスタジオ討論は、①日本人による問題提起、②外国人（元外国人を含む）による問題提起、③ビデオ映像など番組制作者による問題提起という3つのカテゴリーに分類した。

(b) 主要領域：スタジオ討論で、問題提起者によって提起された分析対象テーマの領域（1つのみ）を以下の10のカテゴリーに分類した。①文化・社会慣習（食生活、宗教も含む）、②国際政治・歴史・

戦争, ③恋愛・結婚・ジェンダー (同性愛, 国際結婚による文化摩擦も含む), ④犯罪・違法行為 (売春も含む), ⑤人種問題 (人種・国籍による差別など), ⑥時事問題・話題, ⑦スポーツ, ⑧子ども・教育, ⑨経済・仕事 (雇用, 商売, 節約も含む), ⑩その他 (超能力・非科学的現象など)

(c) 問題提起の方向性: 問題提起者 (討論で最初に言及した人も含む) が言及した対象国・地域それぞれに対する意見の方向性を, Budd, Thorp & Donohew (1967) が行った操作的定義を元に, ①好意的, ②非好意的, ③好意的+非好意的, ④中立的という4方向に分類した。

(d) 討論の方向性: スタジオ討論 (日本人パネリストのコメントを含む) での問題対象国・地域に対する意見の方向性を, ①好意的, ②非好意的, ③好意的+非好意的, ④中立的, ⑤言及なし, という5つに分類した。

(e) 討論のトーン: スタジオ討論のトーンを, ①真面目, ②ユーモラス, ③真面目+ユーモラス, ④言及なし, という4つに分類。その他, 問題提起者の属性 (国籍, 性など) 別にも分類した。

なお 28 の分析対象テーマに関して, 大学院生に依頼して信頼性テストを実施したところ, 2人のコーダー間の一致率は 0.69 となり, ある程度の信頼性が保証されたことを付記しておきたい。

IV. 結 果

146 回の放送を通じて, 全体で 295 のテーマがあがり, そこでは延べ 523 の問題対象国・地域 (「外国・外国人」, 人種, 文化圏, 民族名などを含む) への言及があった。全体として, アメリカ (98 回), 外国人 (46 回), 中国 (38 回), 韓国 (27 回), アフリカ (24 回) などへの言及回数が多くみられ, それらの国・地域数は計 77 種類と多岐にわたっていた。それをスタジオ討論とそれ以外の部分に分けると, スタジオ討論では 202 のテーマ, 延べ 373 の国・地域への言及があり, スタジオ討論以外では 93 のテーマ, 延べ 150 の国・地域名があげられていた。したがって, スタジオ討論の過程での問題提起が全体の約 7 割を占めることになるが, スタジオ討論では非好意的な問題提起が 56% と過半数を占めているのに対して, スタジオ討論以外では, 好意的な提示が 57% と過半数を占めており, 両者の間で取り上げるテーマの方向性を大きく異にしていることが確かめられた (図 1)。以下では, スタジオ討論の部分を中心に分析を進めていくが, その後でスタジオ討論以外の部分でのテーマの取り上げ方の特徴についても検討したい。

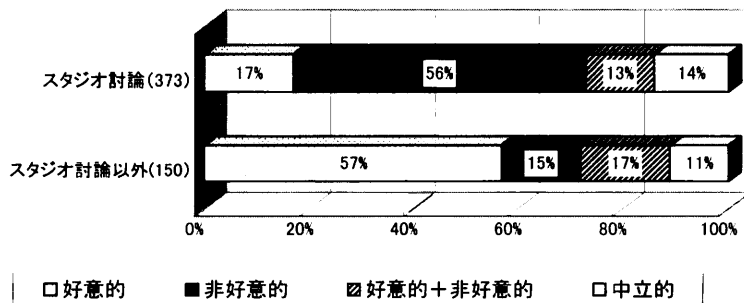


図 1 問題提起の方向性 ($p < .01, \chi^2(523, 3) = 100.3$)

1. スタジオ討論全体の傾向

スタジオ討論であげられた 202 の分析対象テーマでは、日本人による問題提起が 81 回、番組制作者（ビデオ映像など）による問題提起が 76 回であり、外国人からの問題提起（45 回）よりも多くみられた。だが、問題対象国・地域数で見ると順序は入れ替わり、延べ 373 の国・地域のなかで、番組制作者によるものは 144 であり、日本人があげた国・地域数の 124、外国人があげた国・地域数の 105 よりも多くみられた。つまり、番組制作者の問題提起では、より多くの国・地域数が言及されたことになる。

問題対象国・地域としては、アメリカ（87 回）、外国人（41 回）が特に多く言及され、次いで中国（29 回）、アフリカ（23 回）、韓国（21 回）などの言及回数が多かった。領域別では、文化・社会習慣（87 回）、恋愛・結婚・ジェンダー（65 回）などの文化摩擦を反映したと思われる問題提起、国際政治・歴史・戦争（82 回）、犯罪・違法行為（32 回）、人種問題（23 回）など、深刻なテーマも数多く提示された。

問題提起の方向性に関しては、日本人による問題提起で、非好意的な問題提起の割合が 69% であり、外国人による問題提起の 56%、番組制作者による問題提起の 44% よりも高い割合であった（図 2）。また、領域別に見てみると、非好意的な問題提起が占める割合は、恋愛・結婚・ジェンダー（72%）、文化・社会習慣（67%）、人種問題（65%）、犯罪・違法行為（57%）などで高い一方で、好意的な問題提起が占める割合はスポーツ（53%）、その他（50%）、経済・仕事（40%）などで高かった。

討論の方向性に関しては、「好意的+非好意的」という両方向の意見・コメントがみられた国・地域が 56% と過半数を占めた。つまり、問題提起では非好意的に提起されても、討論ではそのような問題提起に対する反論、同調する意見など、賛否両論に分かれた議論が展開されたことになる。また、非好意的な討論（13%）は、好意的な討論（6%）や中立的な討論（7%）よりもやや多かった。

討論のトーンを見てみると、真面目な討論やコメントがなされた国・地域が 46% で最も多かった。それ以外は、「真面目+ユーモラス」（27%）、ユーモラス（8%）の順で多くみられた。つまり、ユーモアを交えながらも、約 7 割の国・地域が真面目に議論されたことを示唆している。領域別で、真面目に議論される割合が高かったのは、国際政治・歴史・戦争（72%）、人種問題（57%）などであり、ユーモラスに

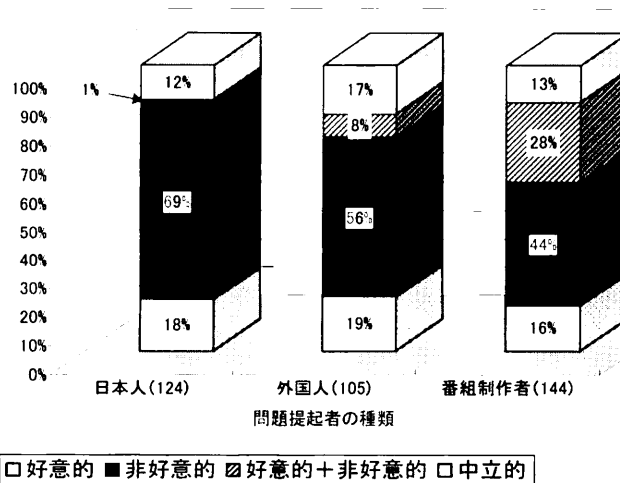


図 2 スタジオ討論における問題提起者の種類と方向性 ($p < .01, \chi^2(373, 6) = 49.8$)

議論される割合は、恋愛・結婚・ジェンダー(20%)で他領域よりも高かった。

なお、男性によって提起された国・地域数は155であり、女性により提起がなされた国・地域数(56)よりも3倍近く多くみられた。また、非好意的な問題提起が占める割合は、女性による提起では80%と高く、男性の59%よりも高かった。さらに、女性の問題提起がユーモラスに議論される割合は21%であり、男性(4%)よりも高くみられた。これは、女性からの問題提起のなかで、恋愛・結婚・ジェンダー(59%)が過半数を占め、ユーモラスに議論される傾向が強いこと、一方男性からの問題提起では、国際政治・歴史・戦争(26%)と人種問題(23%)が過半数を占め、真面目に議論される傾向があったためである。

2. スタジオ討論における「外国・外国人」に対するイメージ

(a) 番組全体での「外国・外国人」イメージ

スタジオ討論ではアメリカに次いで、「外国・外国人」が言及される回数が41回と多く、そのうち、非好意的な問題提起の割合が83%であり、言及回数の多かった10カ国・地域のなかで最も高い割合であった(表1)。領域別では、「外国・外国人」に対する問題提起は、恋愛・結婚・ジェンダー(12回)、文化・社会習慣(10回)、人種問題(7回)、犯罪・違法行為(5回)などで多くみられた(表2)。

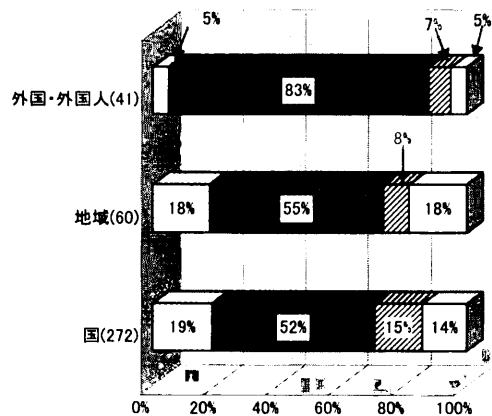
さらに、スタジオ討論で言及された延べ373の国・地域を、「外国・外国人」、地域(人種、文化圏、民族なども含む)、国というカテゴリーレベル別に問題提起の方向性を比較した。その結果、地域、国レベルでは、非好意的な問題提起はそれぞれ55%、52%であったが、「外国・外国人」に関してのみ、83%という高い割合で非好意的な問題提起がみられた(図3)。この「外国・外国人」、地域、国というカテゴリーレベルが、それぞれの領域での言及回数に占める割合を比較すると、「外国・外国人」という言葉は、人種問題(30%)、経済・仕事(20%)、恋愛・結婚・ジェンダー(18%)、犯罪・違法行為(16%)などで、多く用いられる傾向がみられた。ちなみに地域レベルのカテゴリー(アフリカ、黒人など)は、恋愛・結婚・ジェンダー(26%)、人種問題(26%)、文化・社会習慣(21%)などの領域で多く用いられて

表1 スタジオ討論における問題提起の方向性と国・地域(上位10のみ)

	好意的	非好意的	好意的+非好意的	中立的	合計
アメリカ	26%(21)	52%(42)	9%(7)	14%(11)	100%(81)
外国・外国人	5%(2)	83%(34)	7%(3)	5%(2)	100%(41)
中国	3%(1)	62%(18)	10%(3)	24%(7)	100%(29)
アフリカ	17%(4)	52%(12)	9%(2)	22%(5)	100%(23)
韓国	19%(4)	48%(10)	19%(4)	14%(3)	100%(21)
黒人	20%(3)	53%(8)	0%(0)	27%(4)	100%(15)
インド	17%(2)	75%(9)	8%(1)	0%(0)	100%(12)
イギリス	27%(3)	27%(3)	18%(2)	27%(3)	100%(11)
ヨーロッパ	20%(2)	50%(5)	30%(3)	0%(0)	100%(10)
ドイツ	22%(2)	11%(1)	33%(3)	33%(3)	100%(9)
全体	17%(65)	56%(208)	13%(49)	14%(51)	100%(373)

表 2 スタジオ討論における領域と問題対象国・地域

	1 位	2 位	3 位	4 位	合計
文化・社会習慣	アメリカ (20)	外国人, アフリカ (10)		中国 (8)	87
国際政治・歴史・戦争	アメリカ (25)	中国, 韓国 (8)		バキスタン (5)	82
恋愛・結婚・ジェンダー	外国人 (12)	アフリカ (8)	アメリカ (6)	黒人 (5)	65
犯罪・違法行為	アメリカ (7)	中国 (6)	外国人 (5)	ヨーロッパ, オランダ (2)	32
人種問題	外国人 (7)	黒人 (5)	アメリカ, 中国, ロシア (2)		23
時事問題・話題	アメリカ (4)	中国, インド, ロシア (3)			22
スポーツ	アメリカ (7)	外国人 (2)	他は各 1		19
子ども・教育	アメリカ (6)	アフリカ, ドイツ, フランス (2)			19
その他	外国人, アメリカ (3)		他は各 1		14
経済・仕事	外国人, バキスタン, フィリピン (2)			他は各 1	10



□好意的 ■非好意的 ▨好意的+非好意的 □中立的

図 3 問題対象国・地域のレベル別にみた問題提起の方向性 (スタジオ討論のみ) ($p < .05$, $\chi^2(373, 6) = 16.5$)

いた。

(b) 日本人問題提起者による「外国・外国人」のイメージ

問題提起者の種類によって分析を加えると、「外国・外国人」という言葉を含んだ問題提起は、日本人の場合には 19% となっており、外国人 (8%)、番組制作者 (6%) による問題提起よりも相対的に高い割合を占めていることがわかる (図 4)。「外国・外国人」に対する問題提起の内容を具体的に示したのが表 3 であるが、外国人からの問題提起では、「日本の会社は外国人にチャンスをくれない」などのように、外国人として日本人から差別を受けた体験、つまり、自分たちに対する日本人の態度に言及する際に用いられることが多い。したがって、「外国・外国人」というカテゴリーは、通常日本人 (番組制作者も含む)

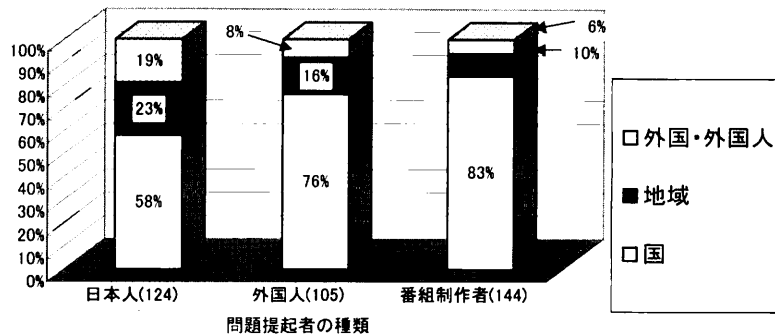


図4 スタジオ討論における問題提起者の種類別にみた問題対象国・地域の割合 ($p < .01, \chi^2(373, 4) = 24.1$)

によって、「外集団」としての概念として用いられた傾向が強い。

しかも、日本人からの問題提起では「日本の男より外国人の男のほうが絶対イイ」（日本・女性）という提示のみが好意的であり、ここでは「ブラット・ピットみたいなカッコイイ男性」と言っていることから、外国人といっても、実際にはアメリカ人を念頭に置いている様子うかがわれる。また、「日本人はこれを言うとても喜ぶ『外国人みたいですわね』（コロンビア・男性）」という問題提起でも、その「外国人の中には、ヨーロッパとアメリカしか入ってないですよ」とビートたけしから指摘されており、好意的なイメージとともに外国人が言及される場合は、「外国人＝アメリカ人、ヨーロッパ人」である場合が多い。反対に、非好意的な問題提起には、フィリピン、中国、インドなどのアジア諸国、ブラジル、ジャマイカ、チリなどの中南米諸国の出身者をさしている場合が多い（表3）。また、「（レストランで）ライスと水だけでねばる」という問題提起では黒人をさしており、「ナンパ外国人は大嫌いです」という問題提起では、実際にはインド人を念頭に置いていることも確かめられている。

外国人犯罪に関しても、ビデオ映像などを元に放映されたが、映像で言及されたイラン人や中国人などが、同国出身者のなかに犯罪者が多いことを認め、「日本の警察が甘い」「日本は平和ボケ。自分のものは自分で守るのが世界の常識です」という一見開き直ったような問題提起もなされている。だが、バブル期に仕事を求め来日した人たちが、現在の不況期において、「外国人」というハンディキャップを背負っているために就職ができず、母国に帰りたくても帰れないという状況にあるなどの社会的背景、同番組に参加しているような真面目に頑張っている外国人も大勢いることをわかってほしいと、切実に訴える場面も番組内ではみられた。

また、日本人によって提起された延べ125の対象国・地域のみを抽出し、対象国・地域別にみけると、外国人に対して24回と最も多く、しかも非好意的な問題提起の割合が92%（22回）と高い（表4）。

3. 日本人によって提起された問題対象国・地域のイメージ

日本人による問題提起の中では、外国・外国人（24回）、アメリカ（21回）、アフリカ（12回）、黒人（9回）に言及することが多かったため、ここでは、アメリカ、アフリカ、黒人に対するイメージを中心に、その内容を整理してみたい。

(1) アメリカ

(a) 番組全体でのアメリカのイメージ

アメリカは、スタジオ討論全体で81回と最も多く登場し、領域別でも、人種問題、恋愛・結婚・ジェ

表 3 外国・外国人に対する問題提起の内容

領域	問題提起の内容	関連する地域・国籍	問題提起の方向性	問題提起者の国籍
文化・社会 習慣	(混雑したレストランで) 外国人はライスと水だけでねばる	黒人	▼	日本
	外国人のせいで店長が首になった	中国	▼	
	“ベット・水商売・外国人お断り” は止むを得ない	フィリピン	▼	
	なぜ外国人は電車のなかでうるさいんですか		▼	
	なぜ外国人は鼻につくほどきつい香水をつけているんですか。なぜ外国人は目つきが悪いんですか		▼	
	なぜ外国人は日本で当然のように英語で話しかけてくるんですか		▼	
	お酒を注がれるのを嫌がる。外国人には義理人情がないんですか		▼	
	外国人は自分のミスを絶対認めない		▼	
	外国人はとにかく時間にルーズ	東南アジア	▼	
恋愛・結婚・ ジェンダー	日本の男より外国人の男のほうが絶対イイ	アメリカ	△	日本
	妻の不満 ある外国人の奥さんの場合 (キューバの習慣を押し付ける, 落としたものを食べる, パンツを嗅ぐなど)	キューバ	▼	
	外国人の夫は結婚したとたん働かなくなった	ジャマイカ	▼	
	アニータにはキャバクラ嬢もビックリ。外国人女は金に群がるゴキブリです	チリ	▼	
	外国人は, そこら辺でキスして平気なんですか		▼	
	(外国人に) 英語が話せないのに付けこんで, お酒を飲まされた		▼	
	(外国人パイロットからの) ナンパを断ったら, 食事代を返せと言われた		▼	
	しつこい外国人の腕をへし折ってやりました		▼	
	この番組の外国人にナンパされました	ガーナ	▼	
	私は外国人が大嫌いだ。インド人も最悪。ナンパ外国人は大嫌いです	インド	▼	
経済・仕事	(定員オーバーで平気でタクシーに乗る) セコイ外国人は乗せたくない	フィリピン	▼	
犯罪・違法行為	外国はドロボーが多い	ブラジル	▼	
人種問題	どうしてガイジンと言われると嫌がるんですか		中立的	
スポーツ	助っ人外国人のやりたい放題: 日本の野球をナメている。アメリカじゃやらないだろ	アメリカ	▼	

表3 (つづき)

領域	問題提起の内容	関連する地域・国籍	問題提起の方向性	問題提起者の国籍
その他	国際人になるために大切なのは言葉じゃない、お金さえあれば大丈夫 (日本の外国人も日本語しゃべれない人がたくさんいる)		▼	日本
恋愛・結婚・ジェダー	ハーフに対するイジメはすごい。私は絶対子どもを産まない (日本でもカナダでも外国人扱いされた経験から)	カナダ	▼	カナダ
	日本に来たらずごくもてるようになりました。日本はヒモ天国です (外国人の場合、差別や読み書きの問題で、仕事を見つけるのが難しい)	トルコ	▼	トルコ
経済・仕事	日本の会社は外国人にチャンスをくれない。工場の人たちが、外国人の下で働くのは嫌と言う	パキスタン	▼	パキスタン
犯罪・違法行為	クレジットカード偽造を行う個室マッサージ店の女性のVTR。「日本は平和ボケ。自分のものは自分で守るのが世界の常識です」	中国	▼	VTR+中国
	激増する外国人犯罪・ピッキング、麻薬の密売の実態。「日本の警察は甘すぎる。外国人犯罪者にとって日本は天国だ」	イラン	▼	VTR+イラン
人種問題	北海道小樽市の外国人お断りの温泉。「人種差別は許せない。愛する子どものためにも一生かけて闘います」	ロシア、アメリカ	▼	VTR+日本 (元アメリカ)
その他	(日本人は) 外国人がすべてアメリカ人だと思っている	アメリカ	中立的	オーストラリア
	日本人はこれを言うのととても喜ぶ「外国人みたいですわね」	アメリカ、ヨーロッパ	△	コロンビア
文化・社会習慣	W杯で文化も習慣も違う外国人が日本にやって来たら、日本はどうになってしまうのか		▼	番組制作者
経済・仕事	外国人への差別があり、就職難の日本で懸命に生きる外国人	ガーナ	☆	
犯罪・違法行為	外人ホステスの実態。ルーシー・ブラックマンさん失踪事件はなぜ起きたか	イギリス	▼	
	在日外国人数の増加よりも数倍高い外国人による犯罪の増加率。なかでも中国の割合は高い	中国	▼	
人種問題	今では「外国人・水商売・ペット大歓迎」のマンションを展開する不動産業者		☆	
	日本人は本当に変わったのか、外国人だと断る大家が今でも大半		▼	
	外国人と働くことに抵抗がある。すし屋で黒人の板前を見たときの反応	黒人	▼	
スポーツ	北海道紋別市の外国人お断りの店で、拒否される外国人。外国人と交流できる店もある	ロシア	☆	
	W杯で大勢の外国人、凶暴なフーリガンがやって来る日本は果たして無事に乗り切れるのか		▼	

△=好意的 ▼=非好意的 ☆=好意的+非好意的

表 4 国・地域別にみた日本人問題提起者の方向性（スタジオ討論のみ）

	好意的	非好意的	好意的+非好意的	中立的	合計
外国・外国人	4% (1)	92% (22)	0% (0)	4% (1)	100% (24)
アメリカ	29% (6)	57% (12)	0% (0)	14% (3)	100% (21)
アフリカ	33% (4)	33% (4)	8% (1)	25% (3)	100% (12)
黒人	22% (2)	44% (4)	0% (0)	33% (3)	100% (9)
中国	0% (0)	86% (6)	0% (0)	14% (1)	100% (7)
イギリス	33% (2)	50% (3)	0% (0)	17% (1)	100% (6)
韓国	0% (0)	80% (4)	0% (0)	20% (1)	100% (5)
インド	0% (0)	100% (5)	0% (0)	0% (0)	100% (5)

ンダー、経済・仕事以外のほとんどの領域で最も多くなっている（表2）。特に国際政治・歴史・戦争（25回）でアメリカへの言及が多く、これは米軍基地のある日本、NATO軍によるユーゴスラビアへの空爆、同時多発テロへの報復の是非などが、番組でしばしば取り上げられてきたからである。また、文化・社会習慣（20回）、犯罪・違法行為（7回）でも多い。これは、コロラド州高校生銃乱射事件が番組でも取り上げられ、簡単に入手可能な拳銃、銃を乱射したり、テロリストの武器を紹介したりする番組、性犯罪者や死刑囚の写真公開などが番組制作者によって問題提起され、番組の争点になったためである。また、好意的な問題提起の割合は26%と高く（表1）、これは、日本の自衛隊・スポーツ・愛国心の欠如などへの批判、アメリカ人と偽ってナンパするアフリカ人への批判などで、アメリカが対比的に好意的に提示されることが多かったためである。

(b) 日本人問題提起者によるアメリカのイメージ

スタジオ討論において、日本人がアメリカに対して提起した21の問題の内容を表5に示した。日本人問題提起者は、文化・社会習慣（7回）と国際政治・歴史・戦争（5回）で多いものの、外国人に対する問題提起（表3）と比較すると、比較的多領域に分散する傾向がうかがえる。また、その内容も、「アメリカ人の自慢話にはうんざり」「アメリカ人は偉そう」など、アメリカ人の高慢な態度を指摘する問題提起、企業におけるアメリカ方式の押し付けへの反発、お金を要求することへの批判などがみられる点で、戦争や銃社会の問題を中心に指摘した番組制作者による提示とは大きく異なっている。問題提起の方向性でも、非好意的な問題提起が57%と多いものの、好意的な問題提起も29%と多くみられる（表4）。「海外で英語を学ぶためにアメリカへ行きたい」、危機管理体制やプロスポーツのモデルとしてのアメリカなど、理想やあこがれの対象でありながら、その自己中心的な手法には強い反発も覚えるという日本人のアンビバレントな感情を反映している。

(2) アフリカ・黒人に対するイメージ

(a) 番組全体でのアフリカ・黒人のイメージ

アフリカへの問題提示は23回あり、スタジオ討論全体では4番目に多くみられ（表1）、日本人による問題提起でも12回と3番目に多い（表4）。アフリカに関しては、国名よりも「アフリカ」という地域カテゴリーが多く言及された。領域では文化・社会習慣（10回）が一番多く、日本人により提起されたものが7回あり、過半数を占める。外国人や番組制作者による問題提起では、内戦、飢え、貧困など

表5 アメリカ人に対する日本人からの問題提起の内容

問題対象国・地域	領域	問題提起の内容	問題提起の方向性
アメリカ	文化・社会習慣	日本ではマイナスの言葉をよく使うが、アメリカではプラス面をよく誉める	△
		アメリカ人の自慢話にはうんざり	▼
		アメリカ人は何かにつけて、お金を要求する	▼
		50分働いて10分休憩なんてバカげている。小学生じゃないんだぞ（外資系企業で、アメリカ的なやり方を日本人に押しつける）	▼
		（象牙の印鑑のためにアフリカ象の数が激減との非難を受けて）アメリカだって、バッファローの頭蓋骨をお土産で売っている	▼
		日本人はお金持ちだから、（ホームステイで）お金を取るアメリカ人やイギリスの人から、エコノミック・アニマルと呼ばれたくない	▼
		イギリス料理は、フランスやイタリアに近いから、まずいと言われるが、本当はアメリカ料理のほうがまずい	▼
	恋愛・結婚・ジェンダー	アメリカ人は偉そう、自分はもてると思っている	▼
		アメリカ人がセクハラしてくる	▼
	国際政治・歴史・戦争	（テロに対する危機管理に関して）日本の都心のホテルが危ない。アメリカのように、すぐ対応できるシステムが大事	△
		アメリカのアフガン支援金は安すぎます	▼
		日本をダメにしたのはアメリカだ（終戦後にマッカーサー元帥が来て、学校で大和魂を教えなくなったからだ）	▼
		飛行機がアメリカで最も便利な交通網（だからテロで狙われた）。日本の新幹線、霞ヶ関が危ない	中立的
	経済・仕事	（第2次世界大戦の同盟国がイギリスとアメリカだったと回答し）国際的な恋愛や商売に歴史は必要ありません。大切なのはハートです。	中立的
		テロの影響で（米軍）基地が標的になるとの報道で、観光客が激変。マスコミが沖縄を殺しました。	▼
	時事問題・話題	世界のニュースについて街頭抜き打ちテスト。「国際人になるには冒険心があれば大丈夫（ロサンジェルスで初めて会ったタクシー運転手の家に3週間泊まったが、何もなかった）」	△
	スポーツ	日本プロ野球の危機 日本プロ野球は新聞を売ったり、テレビの視聴率を上げる道具でしかない（アメリカ大リーグとの比較）	△
		助っ人外国人のやりたい放題：日本の野球をナメている。アメリカじゃやらないだろ。	▼
	その他	（あこがれる）外国人の中には、ヨーロッパ人とアメリカ人しか入っていない	△
		街頭インタビューで、海外で英語を学ぶために、32人がアメリカ、5人がイギリス、3人がカナダに行きたいと答える。	△
		アメリカに3年住んでいましたが、大陸名がわからずに困ったことはありません	中立的

△=好意的 ▼=非好意的 ☆=好意的+非好意的

表 6 アフリカ、黒人に対する日本人からの問題提起の内容

問題対象国・地域	領域	問題提起の内容	問題提起の方向性	
アフリカ	文化・社会習慣	アフリカ人はいつも裸なんですか	▼	
		もっと黒くなってアフリカマンになりたい	△	
		渋谷で聞いたアフリカ人のイメージ：ジャンプ力がすごい、多民族、髪が縮れている、陽気、踊りが上手	△	
		アフリカ人はリズム感がいいって本当ですか？	△	
		アフリカ人の視力がすごくいいというのは本当ですか？	△	
		おっぱいを小さくするためにスプーンで胸をたたくのは本当か、おチンチンが大きくなるように、パパイヤの木にぶつけるのは本当か。	中立的	
		アフリカ人は何の肉でも食べるって本当ですか？	中立的	
	恋愛・結婚・ジェンダー	アフリカにもゲイの人たちいるじゃない（アフリカにゲイはいない、ゲイは病気だとの発言を受けて）	中立的	
		アフリカの皆さん、もっと現実をみてください（アフリカにはゲイはいない、ゲイは不自然との発言を受けて）	▼	
		ナイジェリア人の夫には母国に妻がいた。アフリカの民族衣装を見るとムカつく	▼	
		黒人は、アフリカ人というよりは、アメリカ人と言ったほうがもてることあるでしょう。	▼	
	その他	アフリカの動物を見るツアーで、動物が見えているのはアフリカ人だけ	☆	
	黒人	文化・社会習慣	なんで黒人さんは、光物のアクセサリが好きなんですか？	中立的
			黒人の歌や文化は最高。俺も黒人になりたい。	△
外国人はライスと水だけでねばる（レストランで黒人さんは混雑時に食器を下げて帰ってくれない）			▼	
恋愛・結婚・ジェンダー		黒人のナンパは絶対イヤ！ 人の親切を踏みにじる（白人はいいと後で言う）	▼	
		黒人は、アフリカ人というよりは、アメリカ人と言ったほうがもてることあるでしょう。	中立的	
		黒人夫と日本人妻の悩み＝仕事がないと、黒人夫との結婚を両親が許してくれない	▼	
		私たちは腐っていない、黒人は狩猟民族だから追いかけてくるんだ。	▼	
人種問題		何で黒人の人は赤ちゃんの時から黒いんですか？	中立的	
		ミュージシャンの久保田利伸は黒人になりたがっている。	△	

△=好意的 ▼=非好意的 ☆=好意的+非好意的

の問題が提起されている。また、恋愛・結婚・ジェンダー（8回）でも多いのは、「アフリカに同性愛者はいない。同性愛は病気だ」というアフリカ出身者の主張、アメリカ人だとウソをついて日本人女性の関心を得ようとするアフリカ人男性が番組でしばしば非難されたからである。なお、黒人への問題提起は15回とスタジオ討論全体では6番目にすぎないが、日本人による問題提起が9回とその過半数を占

める。

(b) 日本人問題提起者によるアフリカ・黒人のイメージ

アフリカと黒人に対する日本人による問題提起の内容を示したのが表6である。アフリカに関しては、12回言及され、好意的、中立的な問題提起も少なくないものの、好意的な内容の内訳は、ジャンプ力がすごい、リズム感がよい、陽気、視力がよいなどであり、「アフリカ人＝未開の地でヤリをもって裸で生活し、踊りが上手」というステレオタイプのイメージを反映したものが多い(表6)。また、黒人に関しても、好意的な内容は音楽に関するものに限られており、「黒人のナンパは絶対イヤ」「黒人は狩猟民族だから追いかけて来る」など、白人を優位におき、黒人を差別すると言った非好意的な内容の問題提起が多くみられる。

(3) その他の国・地域のイメージ

中国への問題提起は、スタジオ討論全体で29回あり、非好意的な問題提起が占める割合は62%(18回)と高く、好意的な問題提起は1回ときわめて少ない(表1)。領域別では、国際政治・歴史・戦争(8回)で最も多く、これは南京大虐殺、「シナ」という言葉の使用、歴史教科書の是非などが番組で取り上げられたからである。また、文化・社会習慣(8回)や犯罪・違法行為(6回)などで多く、これは「中国人は人の話を聞かず、自分が正しいと言い張る」「中国人には契約の精神がない」などの主張、中国人の密入国、売春などの犯罪が番組で取り上げられたことと関連している。これに対して、韓国に関する問題提起は22回と中国より少ないものの、好意的な提示も4回みられている(表1)。これは「韓国の男性はリーダーシップがとれる」「テロにあつたら、祖国に帰って戦います」などの韓国男性からの主張が取り上げられたこと、「勇気ある韓国人青年(JRホーム転落事故)」などが番組制作者によって提示されたことによる。だが、非好意的な問題提起も48%(10回)あり、そのなかには「『朝鮮人はキムチくさい、国に帰れ』と言われた」「タクシーで韓国人とわかると、Hな話をした」など、韓国人が日本人から受けた差別体験を語っているものも含まれている。

日本人からの問題提起では、「日本に来た中国人がツアー最終日に姿を消す」「中国のトイレにドアがないって本当ですか」「韓国は日本のことをライバル視しすぎ」など、中韓両国に対して非好意的な問題提起が多かった(表4)。

また、インドについての言及回数は12回と少ないものの、非好意的な問題提起が占める割合が75%(9回)と高い。その内容においても、「インド人が使ったトイレは茶色に汚れている」「カレーばかりで飽きないのですか」などの問題提起が日本人からあり、インド出身者が「インド＝カレー、ガンジス川での沐浴」というインドに対するステレオタイプがあると指摘していたが、これを覆すような問題提起はみられていない。

さらに、地域別に問題提起の方向性を探ると、中南米諸国への言及数は14回と最も少ないものの、犯罪、詐欺などの文脈で言及されることが多く、非好意的な問題提起の占める割合が79%(11回)と他の地域と比べて高い。したがって、中南米諸国のネガティブなステレオタイプのイメージが表出された可能性を示唆している。

4. スタジオ討論以外で表出された外国人イメージ

スタジオ討論以外では93の分析対象テーマがあがり、番組全体の中では32%を占めるにすぎないが、スタジオ討論と大きく異なる特徴がみられた。提示形態で多くみられたのは、人物ファイル(「在日

外国人ファイル」など)の35回、イベント企画(お国自慢、健康法、節約法、霊能力者など)の27回などであり、世界比較(「人間 Watching」「世界比べて見よう」など)は13回と少なかった。人物ファイルと世界比較のシリーズはビデオ映像を中心に制作されており、それぞれ39の国・地域名があげられた。また、イベント企画では、スタジオ内での実演が中心となっており、48の国・地域名が言及された。

国・地域別では、アメリカ(17回)、ケニア(13回)、ベナン(10回)、中国(9回)、トンガ(8回)などが多く登場した。また、ブラジル、フィリピン、フランス(各7回)、韓国、イタリア、ガーナ(各6回)なども多く、アメリカ、中国、韓国以外の国では、スタジオ討論以外で言及された割合が過半数を占めている。ケニア、イタリア、フランスが多いのは、世界比較シリーズで数多く登場したためであり、ベナンは同国出身のゾマホン・ルフィンが母国に小学校を建設するという夢を実現する過程が継続して放映されたためである(9回)。また、トンガはダイエット合宿の様相が継続して放映され(8回)、中国は霊能力者の実演(5回)が紹介されたためである。さらに、「外国・外国人」(5回)や地域カテゴリーはほとんど言及されておらず、国名が言及されている点がスタジオ討論とは大きく異なる。

問題提起の方向性については、57%の国・地域が好意的に提示されており(図1)、特に人物ファイル(69%)、イベント企画(65%)では好意的に提示される割合が高かった。たとえば、「在日外国人ファイル」では、原宿で商売を始めたが、他の店主の反感を買い、大阪アメリカ村に移り、閉店後も商売繁盛のために、明け方までチラシ配りをしているチャーリー・アンサさん(ガーナ出身)、サムライに憧れて来日し、日本で空手を教え、礼儀や日本文化を尊重するオーレン・ロースさん(イスラエル出身)、夫の死後も日本に残り、借金を返済しながら、家族を守る長沼ニーダさん(フィリピン出身)などが紹介された。「在日外国人ファイル」で紹介される多くの人が、日本で外国人として受ける差別体験、就職難、妻子との別居などを経験しながらも、日中と夜間の仕事を掛け持ち、真面目に働き、母国に仕送りさえするという姿が感動的に描かれている。スタジオ討論での外国人イメージがステレオタイプ的な要素が強かったのに対し、この「在日外国人ファイル」では反ステレオタイプ的な外国人のイメージを提供しているものも多い。また、イベント企画でも、ペルシャ絨毯(イラン)、牛肉(ブラジル)などのお国自慢、物価高の日本で暮らしながらも、母国に仕送りをするための在日外国人の節約術などが好意的に紹介された。

なお、国・地域別では、好意的な提示は、アメリカ(11回)、ベナン(9回)、中国(7回)、フィリピン、フランス(6回)などで多かった一方で、非好意的な提示は、ケニアで7回と多かった。これは「人間 Watching」や「世界比べてみよう」などの世界比較シリーズでケニアが11回登場し、父親の絶対的な権力、男尊女卑的な価値観、経済面における途上国としての側面が、他の国々との対比において、非好意的に紹介されたためである(萩原、2003)。スタジオ討論以外でも、世界比較シリーズでは、文化の相違が対比的に強調されたため、ステレオタイプ的な問題提起が多くみられた。

V. 考 察

番組全体の分析では、主要領域としては、文化・社会習慣が最も多かった。これは、特定の外国人の行動・習慣などが、日本人や他の外国人にとっては異質であり、文化摩擦が顕在化しているためであろう。同様に、3番目に多かった恋愛・結婚・ジェンダーでも、国際結婚や男女交際における常識・ジェンダー規範の相違、同性愛などが争点となっており、これも文化・社会習慣の違いによる文化摩擦と解

積できる。また、国際政治・歴史・戦争に関する問題提起も2番目に多く、しかも真面目な討論が交わされてきたことが明らかになった。ニュースやニュース解説などで正面から取り上げることが難しいテーマも、討論系バラエティー番組という枠組みのなかでこそ、自由に発言することができ、許容されたという側面もあったのではないと思われる。

問題提起の方向性に関しては、スタジオ討論では、文化摩擦、国際紛争、歴史、経済、教育などのさまざまな問題点を、ネガティブな問題として提起し、率直な討論を展開してきた。また、「外国人」という言葉も、スタジオ討論で、より多く用いられ、ネガティブなイメージと結びついて用いられる傾向が、他の地域・国名などよりも強くみられた。これは、特定の国や地域の名前をあげ、その文化や社会習慣などを批判するよりも、「外国人」というカテゴリーを用いて一般化し、カモフラージュを施した上で批判したほうが、心理的抵抗を低減できた側面があるのではないと思われる。一方で、スタジオ討論以外では、苦難を乗り越えて懸命に働いたり、母国へ小学校を建設したりする在日外国人の姿などを好意的に描いてきた様子が見取れる。これは、個人に焦点を合わせた在日外国人ファイル、健康法・節約術・伝統的な食べ物などのような形で、特定の国や個人を紹介するようなイベント企画では、ネガティブな問題提起をしにくいことの現われであろう。

外国人に関して、非好意的な問題提起が多いという点では、ネガティブで、均一的な外国人イメージを提供していた。しかも、外国人という言葉は、文化・社会習慣、恋愛・結婚・ジェンダーの領域で多くみられ、日本人によって用いられていたことから、ある特定の外国人の行動において、日本とは異なる文化・社会習慣、恋愛や結婚生活における習慣などに接し、ネガティブな経験や結果を伴ったときに、「外国人」という集団に典型的にみられる問題行動として一般化し、外国人に対するネガティブなイメージが形成されたのではないと思われる。

番組のなかで、日本人によって提起された外国人イメージが、そのまま日本人の外国人イメージであると断定することはできない。そこでは、番組制作者のフィルターを通して、バラエティー番組としての面白さ・話題性なども考慮の上で、問題提起者やその内容が選択されているからである。しかし、スタジオ討論における番組制作者からの問題提起では、外国人、地域名というカテゴリーレベルがあまり用いられずに国名が主に用いられ、問題提起の方向性・領域での散らばり度は高いことから、より意識的にテーマや提示方法が取捨選択された可能性がある。一方で、日本人問題提起者の取捨選択においては、日本人が抱く外国人イメージを念頭におき、より無意識的にステレオタイプ的な問題提起がなされた可能性がある。

大坪・相良・萩原(2003)の調査結果では、『ここがヘンだよ日本人』の視聴経験が多い人ほど、「外国人犯罪が多いので、日本人が外国人に警戒心を持つのは仕方がない」「外国で日本人が盗難にあったり、だまされたりするのは、日本人の側にも問題がある」「日本の若い女性は、外国人男性に対する警戒心がなさすぎる」などの項目で賛同する傾向がみられている。これらは、外国人や外国は「警戒すべき対象」とあるという点で一致しており、外国人に対して、ネガティブな問題提起がなされた反映であるとも言える。ただし、その原因を外国人や外国に外的に帰属させるだけでなく、日本人という内集団の「警戒心の欠如」という形で、自己批判的な内的帰属もみられる点は興味深い。これは、外国人に対するネガティブな問題提起がなされても、討論のなかでは、提起した日本人の「警戒心の欠如」のほうがむしろ批判される場合も多く、そのような討議のなかで形成されていった価値観とも言えよう。

一方で、スタジオ討論以外では、日本に駆け込もうと、日本語を学んだり、慣れない日本の文化や社

会習慣に戸惑ったり、物価の高い日本で節約に励んだりする在日外国人の姿が繰り返し紹介されてきた。このような特徴が、大坪・相良・萩原(2003)の調査結果でも、視聴経験が多い人ほど、「日本語を学び、日本社会に駆け込もうとしている外国人には好意を感じる」という項目で賛同する人が多い点に現れたと思われる。しかも、多国籍の外国人がスタジオで一同に介し、学習が困難だとされる「日本語」を駆使して意見を交わすという番組自体に、多くの視聴者は驚き、感心し、好意を抱いたのではないかと考えられる。

Murdock(1999)は、テレビが結論や解決方法を示さずに、対立する言説・視点の多様性を示す意義を語っているが、そのようなプロセスのなかでこそ、視聴者が推論を働かせ、思考することができるとも言える。『ここがヘンだよ日本人』でも、意見が対立し、結論が出ないまま、番組が終了したように思えるケースも少なくなかった。だが、このような一見中途半端な幕切れであったからこそ、視聴者に考える機会を提供できた可能性も残されている。

外国人のイメージは、問題提起の内容だけでなく、多様な国籍の外国人のさまざまな言動からも影響を受けるであろう。その討論の方向性としても、好意的・非好意的という両方向で、議論が交わされた国・地域が過半数を超えており、問題提起者が提示したネガティブなステレオタイプの外国人イメージも、討論のなかで、新たな事実が報告され助長されたり、合理的な反論によって軽減されたりといったプロセスを経ている。ステレオタイプの外国人イメージを主張する人たち、反ステレオタイプの外国人イメージを提示する人たちの討論を、どちらが優勢かと判断し、分析することはきわめて難しい。この解釈には、大坪らが指摘したように、個人の趣向・関心・態度、外国人との直接的接触経験などが大きく関連してくると思われる。

本稿は、『ここがヘンだよ日本人』のなかで、どのような外国人イメージが表出されたかを中心にまとめてきた。その結果は、日本人問題提起者からの外国人イメージは、ネガティブで、均一的なイメージであり、日本人がこのようなイメージを抱いている可能性を示唆するものであった。だが、同番組がそのようなネガティブな外国人イメージのみを提供したわけではなく、むしろ、多様な国籍の外国人が日本語で活発に討論する模様を放映するなかで、視聴者は多様なイメージを、それぞれの「外国人」イメージに加味していったのではないかと考える。今後は、テレビ番組のなかでもさまざまな国籍の外国人が自由に発言し、主体的に番組に参加できる機会を提供し、世界中にはさまざまな文化・価値観・社会的習慣があることをメッセージとして送り続けることができるのなら、日本人の外国人イメージがネガティブで均一的なイメージから、多様なイメージへと変わっていくのではないかとと思われる。それこそが、近年、急速に外国人が増えつつある日本において、マス・メディアが果たすべき役割の一つなのではないだろうか。

注

- (1) 本研究は、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所を母体とした「メディア・ステレオタイプング」研究プロジェクト(代表 萩原 滋)の一部を構成するものである。2001年度から3年の予定で開始された同プロジェクトに対しては、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所の研究・教育基金の他、放送文化基金(2001年度)及び文部科学省の科学研究費(2002-2003年度)の補助を受けている。本稿は、日本社会心理学会第43回大会(一橋大学)での発表を元に、更なる分析を加え、加筆修正したものである。末筆ではあるが、信頼性テストにご協力いただいた東京立大学大学院社会学研究科の満森圭氏、分析や原稿執筆にあたり貴重なアドバイスをいただいたメディア・ステレオタイプング・プロジェクトのメンバーの皆様に謝意を表したい。

- (2) 『ここがヘンだよ日本人』の特集テーマ、スタジオ討論の流れ、主要発言者の国籍、外国人の発言総数の推移などの内容については、萩原(2003)を参照されたい。

引用・参考文献

- Budd, R. Thorp, R. K., & Donohew L. 1967 Content Analysis of Communication. New York: Macmillan.
- 唐沢穰 1996 地域ステレオタイプと集団間認知—名古屋人・大阪人ステレオタイプと外集団均質化効果—日本グループ・ダイナミックス学会第44回大会発表論文集 pp.100-101.
- 川竹和夫・杉山明子(編著) 1996 メディアが伝える外国イメージ 圭文社
- 川竹和夫・杉山明子・原由美子・櫻井武(編) 2000 外国メディアの日本イメージ—11カ国調査から— 学文社
- 萩原 滋 2001 1990年代における大学生のテレビ視聴の動向—都内4大学での継続的調査結果の報告—メディア・コミュニケーション 51, 111-129.
- 萩原 滋 2003 『ここがヘンだよ日本人』: 分析枠組と番組の特質 メディア・コミュニケーション, 53, 5-27.
- 萩原 滋・御堂岡 潔・中村雅子 1987 テレビの中の外国・外国人—日本のテレビにあらわれた外国要素の内容分析— 新聞学評論, 36, 57-72.
- 法務総合研究所 2002 平成14年版犯罪白書—暴力的色彩の強い犯罪の現状と動向— 財務省印刷局
- Judd, C. M. & Park, B. 1988 Outgroup homogeneity: Judgments of variability at the individual and group levels. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 778-788.
- Murdock, G. 1999 Rights and representations: Public discourse and cultural citizenship, In Gripsrud, J. (Ed.) Television and common knowledge, pp. 7-17, Routledge: London.
- 中村 真・佐藤達哉 1994 集団サイズがもたらす認知的バイアスに関する研究—大集団への肯定的評価と小集団への否定的評価について— 日本心理学会 58回発表論文集 p.159
- 野呂夏雄 2002 外国人労働者と移民の受け入れ *LDI report* [ライフデザイン研究所], 135, 4-25.
- 大坪寛子・相良順子・萩原 滋 2003 調査結果に見る『ここがヘンだよ日本人』の番組視聴者像と視聴効果 メディア・コミュニケーション, 53, 77-96.
- Park, B., & Rothbart, M. 1982 Perception of out-group homogeneity and levels of social categorization: Memory for the subordinate attributes of in-group and out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 1051-1068.
- Maurer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. 1995 Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 812-824.
- 渋谷明子・萩原 滋 2002 TVステレオタイピング: 『ここがヘンだよ日本人』(TBS系)を素材として(2)—外国人イメージ関連素材の内容分析— 日本社会心理学会第43回大会発表論文集(一橋大学) pp.622-623.
- Sugimori, S. 1991 Effects of group size upon proportion judgments of likable and unlikable members and group impression: Small is bad, not that large is good. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 30(3), 217-227.
- 杉森伸吉 1995 母集団サイズと成員誘発性の間の幻相関認知に関する実験的研究 社会心理学研究, 11(1), 39-50.
- 杉森伸吉 1999 幻相関とステレオタイプ 岡 隆・佐藤達哉・池上知子(編) 偏見とステレオタイプの心理学 現代のエスプリ, 384, 24-36.
- 竹田美知 2000 若者の外国人に対する意識とその影響要因—関西地域の大学生に対する調査から— 家族研究論叢 [奈良女子大学生生活環境学部生活文化研究室家族研究部門], 6, 39-54.